St. Luke's International University Repository

友達、友情研究の検討:
小学校教育との関係に着目した考察に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺町, 晋哉, 歌川, 光一, Teramachi, Shinya, Utagawa, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00016700

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

聖路加国際大学教育実践論集 Vol.2　pp.1-15

［研究ノート］

友達、友情研究の検討
―小学校教育との関係に着目した考察に向けて―

寺町　晋哉（宮崎公立大学）
歌川　光一（聖路加国際大学）

１．「友達」の存在感
１－１．学校に通う意義との関連から

「学校の思い出」を尋ねられたとき、何を思い出すだろうか。「学校へ通うことで得られたもの」を尋ねられたとき、何を挙げるだろうか。両者の問いに共通して登場する代表的なものの一つに「友達」[1]があるだろう。

「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」[2]（2018 年）において、「学校に通う意義」について「意義があった/ある」と「どちらかといえば意義があった/ある」と答えた割合を表したものが表 1 である。70.5%の日本人が「友達との友情をはぐくむ」を意義がある（あった）ものと認識している。各国と比較して突出した割合ではないが、9 項目の中では 4 番目であり相対的な位置づけは高い。この相対的な位置付けが高いことは日本の特徴でもある。「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」の前身となる「世界青年意識調査」を含め、日本ではこれまで「友達との友情をはぐくむ」が最も肯定された項目であった[3]。学校へ通う際、「友達」の存在は重要であることがわかる[4]。

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
日本	一般的・基礎的知識を身に付ける（80.4%）	学歴や資格を得る（72.7%）	自由な時間を楽しむ（72.7%）	友達との友情をはぐくむ（70.5%）	専門的な知識を身に付ける（68.8%）	自分の才能を伸ばす（63.6%）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（59.4%）	課外活動に取り組む（57.8%）	先生の人柄や生き方から学ぶ（54.9%）
韓国	学歴や資格を得る（82.7%）	一般的・基礎的知識を身に付ける（81.7%）	専門的な知識を身に付ける（73.5%）	友達との友情をはぐくむ（73.2%）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（69.5%）	自分の才能を伸ばす（68.7%）	先生の人柄や生き方から学ぶ（59.5%）	課外活動に取り組む（59.4 %）	自由な時間を楽しむ（55.1%）
アメリカ	一般的・基礎的知識を身に付ける（89.7 %）	専門的な知識を身に付ける（87.5 %）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（84.4 %）	学歴や資格を得る（84.1 %）	自分の才能を伸ばす（81.2 %）	自由な時間を楽しむ（76.8 %）	友達との友情をはぐくむ（76.3 %）	先生の人柄や生き方から学ぶ（72.8 %）	課外活動に取り組む（71.1 %）
イギリス	一般的・基礎的知識を身に付ける（88.6 %）	学歴や資格を得る（82.3 %）	専門的な知識を身に付ける（82.1 %）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（81.4 %）	自分の才能を伸ばす（79.4 %）	友達との友情をはぐくむ（78.6 %）	自由な時間を楽しむ（74.9 %）	先生の人柄や生き方から学ぶ（70.3 %）	課外活動に取り組む（65.8 %）
ドイツ	一般的・基礎的知識を身に付ける（91.5 %）	専門的な知識を身に付ける（88.4 %）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（87.2 %）	学歴や資格を得る（85.8 %）	自分の才能を伸ばす（85.5 %）	自由な時間を楽しむ（82.5 %）	友達との友情をはぐくむ（79.8 %）	課外活動に取り組む（69.9 %）	先生の人柄や生き方から学ぶ（54.9 %）
フランス	一般的・基礎的知識を身に付ける（93.7 %）	専門的な知識を身に付ける（90.0 %）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（86.9 %）	学歴や資格を得る（86.1 %）	自分の才能を伸ばす（85.9 %）	自由な時間を楽しむ（84.2 %）	友達との友情をはぐくむ（81.2 %）	課外活動に取り組む（70.0 %）	先生の人柄や生き方から学ぶ（67.5 %）
スウェーデン	一般的・基礎的知識を身に付ける（87.7 %）	仕事に必要な技術や能力を身に付ける（81.4 %）	自分の才能を伸ばす（79.0 %）	学歴や資格を得る（78.8 %）	専門的な知識を身に付ける（77.1 %）	友達との友情をはぐくむ（68.7 %）	自由な時間を楽しむ（61.6 %）	課外活動に取り組む（59.8 %）	先生の人柄や生き方から学ぶ（46.2 %）

表1　学校に通う「意義があった/どちらかといえば意義があった」の合計割合

出典）「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」（2018年）

「友達」の存在が重要なのは学校だけに限らない。石田（2021）は、家族、企業、地域などの中間集団が衰退・動揺してく社会において、「つきあわねばならない」関係が縮小し、個々人が自らの選考に応じて人間関係を構築していく「選択的関係」が存在感を増すという。そして、ギデンズの「純粋な関係（pure relationship）」の議論をふまえ、人間関係を選べる現代社会では純粋な関係の典型である友人が人間関係の中心になると指摘する（石田 2021：2-3）[5]。

１－２．ジェンダー・セクシュアリティの観点から

教育学の研究対象として「友達」の存在感が増している別の文脈として、ユネスコによる『国際セクシュアリティ教育ガイダンス―科学的根拠に基づいたアプローチ〔改訂版〕』（International technical guidance on sexuality education：An evidence-informed approach［Revised edition］）における「友情」の取扱い方を挙げることができる[6]。同ガイダンスは、8 つのキー・コンセプトを掲げているが、「キー・コンセプト 1　人間関係」では「1.2 友情、愛情、恋愛関係」として「友情」を「愛情」「恋愛関係」とともに「さまざまな愛情の形を含む」ものとして扱っている（同上：77）。また、「友情の重要な構成要素」として「信頼」「共有」「尊重」「共感」「連帯」などを知識として 5～8 歳で学習する目標を立てている（同上）。さらに、「健康的な、および健康的でない人間関係がある」（5～8 歳）、「人間関係における不平等は個人的な人間関係にネガティブな影響を与える」（9～12 歳）、「友だちは他者にポジティブにもネガティブにも影響を与える」（12～15 歳）といった「友達」の負の側面もキーアイデアに含んでいる（同上：77-79）点や、「人間関係はさまざまな愛情の形（友だちとの愛情、親との愛情、恋愛パートナーとの愛情など）を含むもので、愛情はさまざ

まな方法で表現することができる」（5～8 歳）、「子どもが思春期を迎えると、友情や愛情はさまざまに表現される」（9～12 歳）、「成熟した個人として親愛や愛情を表現するさまざまな方法がある」（15～18 歳以上）というように、友情の表現に関わるキーアイデアを含んでいる（同上：77-80）。

１－１で、「選択的関係」について触れたが、「友情」を「愛情」「恋愛関係」と連続性のある選択的関係の一種とし、小学校段階から教える発想や、人間関係の性質一般を、その負の側面や表現方法も含めて子どもに伝えていく、という方向性は、日本の友達、友情研究では深めてこられなかった点であろう。

性教育政策という面から「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を日本がいかに、どの程度受容するかは一つの論点だが、このように、友達、友情研究にも一定の方向性を与えていく可能性が高い。具体的には、「思春期は、保護者や教員との関係よりも友人関係を重視する傾向にあり」、実践としても研究としてもそのことを前提としがちだが、「互いの権利を尊重した関りについて幼少期から学ぶこと」（門下 2021）や、その逆に、「友だち地獄」（土井 2008）、「スクールカースト」（鈴木 2012）など、ピアプレッシャーに関わる問題（荻野 2021）の積極的な解消が目指されていく可能性が出てきている。

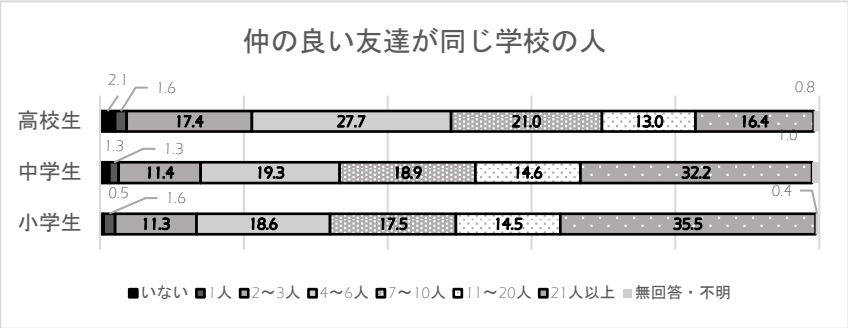
２．「友達」は自由に選択可能か？

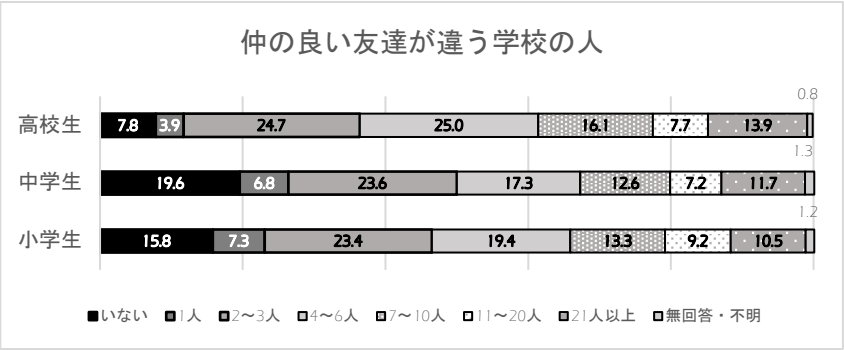
ところで、１では、「選択的関係」としての「友達」「友情」について触れたが、そもそも学校において友達は選択可能な関係だっただろうか。大半の「友達」は同じ学校・学級に所属していたのではないだろうか。

やや古い研究だが、小中学性の友人関係を調査した藤田・伊藤・坂口（1996）では、「ふだん仲良くしている友だち」の約 9 割が学

校のクラスやクラブを基盤としており、小学生の８割以上、中学生の６割以上が「同じクラスが多い」と答えている。

近年でも同様の傾向が見られる。図１は、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行った「子どもの生活と学びに関する親子調査 2017」において、「仲のいい友だち」についての回答結果である。特に義務教育段階では同じ学校で「友達」が形成される傾向にあり、インターネットが発達したからといって学校外へ「友達」の輪が広がるわけではない。





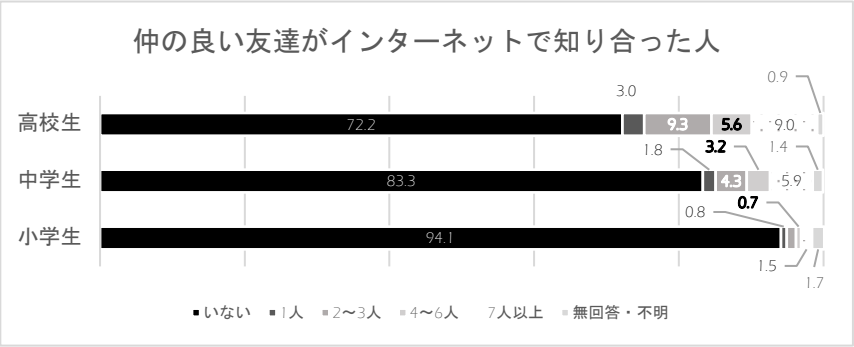


図１「仲の良い友だち友達」の割合
出典）東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 2018：6）

「友達」は同じ学校の中で形成されている。つまり、あらかじめ選択できる関係の範囲が決められているわけである。特に義務教育段階では、大半の子どもたちが学校や学級を自ら選択できるわけではない。もちろん、学校や学級が同じだからといって「友達」になる義務はなく、「一緒にいて楽しい」と思えるような相手だからこそ「友達」になるのだろう。その意味では、選択的であり、関係それ自体による恩恵もあり、学校の「友達」も純粋な関係であろう。

しかし、「友達」となる過程において種々の条件や制約があることを見過ごしてはならない。Allan(1989＝1993)が指摘するように、友情を支える個人の自由意志を規定する社会構造にも目を向け、友情が社会空間や社会関係などの諸要素とどのような関係にあるのかを明らかにする必要がある。

３．小学校の「友達」がもつ特徴

３－１．友達、友情研究と校種

さて、学校の「友達」に関係する諸要素とはどのようなものであろうか。

友達、友情は、「いじめ」のように、それがこじれたりもつれたりする場合に学校教育関係者の中で顕在化しやすい側面があり、従来の生徒指導研究や生徒文化研究として、教育社会学では中学・高校生の、教育心理学では大学生の友人関係研究が主流を占めてきた（土井 2008、鈴木 2012、丹野 2019 ほか）。しかし、友情それ自体は学校の有無に関係なく存在し得るものであり、「友情」と「学校」という制度の関係という意味では、小学校以前の友人関係研究も重要ということになる。

３－２．小学校への着目

本稿では、学校の中でも小学校へ注目し、そこで形成される「友達」を規定する諸要素について簡単に整理していく。

第一に、中間集団である学校で「友達」が形成される。石田（2021）の議論は家族や企業などの中間集団以外の場における「友達」を想定しているが、学校の「友達」は所属する中間集団（学校）そのもので形成されるため、衰退や不安定化の議論に馴染まない。また、上述したように、同じ学校の「友達」が基盤となっていることから、別の学校、塾、インターネットなどの集団が中心になっているとは言えない。

第二に、上述したように、義務教育段階の大半の子どもたちは学校・学級を選択できないため、子どもたちは日常的にかかわる人々があらかじめ限定されている。それに加え、学級がもつ役割も注目に値する。柳（2005）は、近代学校が児童生徒のニーズとは無関係に勉強内容を伝達する場であるため、学校へ通うことそのものが目

的となるような自己準拠システムが必要であり、そのシステムを効率よく駆動させるために学級が機能していると指摘する。自己準拠システムには学校行事や学級活動など、多種多様な活動があり、教師−子ども間、子ども間の一体性も形成（が目指）されながら、学級が子どもの生活のすべてのような共同体と化すという。学校へ通うことで人間関係が限定されているだけでなく、学級の成員間で多くの活動を一緒に行うことが（時には成員間で交流することが）半ば強制されている。こうしたことは、社会全体の中でも学校特有のものだろう。

第三に、中学校よりも小学校において、子どもたちの「友達」関係に対する教師の影響力が増すと考えられる。中学校であれば、学級担任、教科担任、部活動顧問など、複数の教師とのかかわりが増加するため、学級担任の影響力が相対的には低下する。それと比べて小学校は、基本的に学級担任が授業も行うため、一日中子どもたちと接点をもつことになる。すなわち、子ども同士の関係を把握しやすく、彼/彼女らの関係を授業や学級活動と関連させて行動することも増加するだろう[7)]。また、中学生であれば部活動へ所属することで学級以外の関係も生まれやすいが、小学校の場合、学級における関係が中心となりやすい。以上のことから、小学校の「友達」は学級の影響力が中学校と比べて大きいと考えられる。

第四に、小学校の「友達」（あるいは仲間関係）と関係する諸要素について明らかにした研究が少ない。古くは住田（1995）が放課後の仲間集団内の関係や相互作用について詳細に描き出しており、近年でも学童保育における男子の仲間関係について丹念なフィールドワーク調査に基づいた片田（2014）や、児童養護施設における男子の仲間文化を詳細に描き出した山口（2021）もある。これらの研究は小学校の「友達」研究として希少なだけでなく、子どもたちの関係を詳細に描き出した点でも優れたものであるが、放課後、学童

保育、児童養護施設といった学校以外の関係が中心となっており、学校の諸活動が「友達」とどのような関係にあるのかが明らかにされてこなかった[8)]。

４．小学校の友達、友情研究の視点

以上の点をふまえ、小学校の友達、友情研究を行う上で考えられる分析視点について簡単に提示しておきたい。

第一に、「友達」に関する社会調査を行う際、「友情とは何かについて回答者のすべてが同じ観念をもっているかどうかを調査担当者が知り得るのかという問題に直面する」（Allan1989＝1993：5）ことを忘れてはならない。図１の「仲の良い友だち友達」がどういった関係を想定しているのかは、回答者によって異なる可能性が非常に高い。また、調査時期によって回答が左右されることもあるだろう[9)]。大規模な社会調査だけではなく、多角的に小学校の「友達」関係に迫る必要がある。

第二に、学級における「友達」関係を精緻に読み解く必要がある。先述したように、小学校の「友達」は同じ学校、中でも同じ学級で成立する傾向にある。しかし、（当然であるが）同じ学級に所属するからといって、全員が「友達」になるわけではない[10)]。その一方で、同じ学級に所属すれば学校の活動の大半を一緒に行うこととなる。この点は学校の「友達」特有のものだろう。以上のことから、同じ学級であるクラスメートと「友達」の関係について整理する必要があるだろう。

第三に、「友達」であることの内実を明らかにする必要がある。Allan（1989＝1993）が指摘するように、「友達であること」の明確な基準はなく、友人同士の行動パターンを決める規範や慣例は存在するものの、友情それ自体は制度化されているわけではない（Allan1989＝1993：5-6）。つまり、「友達」であったとしても、

第三者に把握可能な制度としての「証明」はできない。特に、純粋な関係の側面が強まった「友達」であればあるほど、「友達」の満足感や恩恵を強く感じられる反面、お互いに関係維持へ関与し続ける必要があり、信頼も所与ではないため、非常に不安定で緊張関係を伴う可能性がある。先に述べたように、小学校では学級以外の場で「友達」を形成しづらいからこそ、この緊張関係は強まると考えられる。

５．「友達、友情」研究と学校の「友達、友情」研究

４で指摘したような、「友達、友情」研究一般に関わる課題（調査時のワーディング、関係の取り出し方）と、学校の「友達、友情」を把握しようとする際の課題(学級編成の実態把握、教員や児童生徒による「友達」とその他の類似概念の使い分け等の実態把握の難しさ等)を目の当たりにした時、後者の課題の前提として前者の課題が横たわっていることは明らかである。

とは言え、だからといって、前者の研究展開を待たなければ、後者の研究は進展しない、という一方的な関係にあるわけではない。児童・生徒が学校において陰に陽に「友達、友情」のあり方を教わる面があることを踏まえれば、学校において「友達」という言葉がどのような意味、文脈上で用いられ、また「（本当の）友達」という理想像がどのように伝達、形成されているかを解明していくことは、「友達、友情」研究一般に貢献するものと思われる。また逆に、一生涯役立つものとして学校で「友達、友情」のあり方を教えているつもりが、まとまりを求められる「学級」という特殊な空間の中で教わったり生じたりする「友達、友情」が、かえっていびつに見えること（例えば、小学校以前の学校段階ではとりわけ、「学級」において友達を「選択」してよいのか不明瞭な雰囲気にある等）もあり得るだろう。

「友達、友情」研究一般の知見や成果を参照しつつ、学校の「友達、友情」をまとまりのある問題群としてみなし、研究を深化させていくことが求められている。

【付記】

本稿は、１－１、２、３－２、４を寺町が、１－２、３－１、５を歌川が執筆した。

寺町執筆分については、科研費・若手研究(B)「新任教師がもつ生徒指導におけるジェンダー観の構築・変容過程」(17K14020、研究代表者・寺町晋哉)、歌川執筆分については、科研費基盤研究（C）「社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究」（18K025485、研究代表者・中村豊）の研究成果の一部である。

【註】

１）友達や友情について明確な定義は存在していな（Chambers2006＝2015、石田 2021）。また、友情は典型的な一つの形態ではなく、一般的観念に含まれる多くの要素が様々な方法で結び付けられる多様な関係である（Allan1989＝1993：22）。そのため、「友達」が指し示す範囲や関係は人によって異なるため、本稿では「友達」と表記する。

２）日本、韓国、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデンの 7 カ国で行われたウェブ調査で、満 13 歳-満 29 歳を対象にしている。

３）2018 年に初めて順位が下がった。

４）無論、コロナ禍において児童・生徒にとって「友達」の存在感にどのような変化が生じているかは重要な論点となってくると思われるが、本稿では想定していない。

５）純粋な関係とは、「社会関係を結ぶというそれだけの目的のために、つまり、互いに相手との結びつきを保つことから得ら

れるもののために社会関係を結び、さらに互いに相手との結びつきを続けたいと思う十分な満足感を互いの関係が生みだしていると見なす限りにおいて関係を続けていく、そうした状況を指している」（Giddens1992＝1995：90）。この純粋な関係の一つに友人関係（本稿では「友達」）が挙げられる（Giddens1991＝2005）。Giddens（1991＝2005）の議論をふまえると、現代の友人関係は、社会的・経済的条件に制約されず、友人関係それ自体が対価であり、互いが友人関係を維持するために関与（commit）していると言える。

ただ、純粋な関係である友人関係は非常に不安定である。なぜなら、外的な制約を受けずに関係そのものを維持し続けなければならないからである。こうした関係の脆弱性を石田（2021）は、「そもそも、関係そのものがお互いの感情によって繋留されるため、関係の存在を視覚的に確認する手段を欠いている。お互い『友人である』という気持ちを更新することによってのみ、友人関係は存続されるのである」（石田 2021：13）と端的に表現している。

純粋な関係は相互信頼に依拠しているが、信頼は「所与」ではなく他者との親密な関係を通じて形成されなければならない（Giddens1991＝2005：107）。この種の信頼は「個人が他者に心を開くこと前提」（Giddens1991＝2005：107）にし、「少なくとも関係性の境界のなかでは、信頼し、かつ信頼に足る人間でなくてはならない」（Giddens1991＝2005：108）。

石田（2021）は心理学や社会学の知見を整理し、人間関係の純粋化・選択化により友人の重要性が拡大する一方で、親密な人間関係が「感情的な親しさ」という不確実なものに委ねられる比重も増すことで人間関係が複雑化していくことを指摘する。

6）以下の引用で示すページ数は、ユネスコ編・浅井ほか訳（2020）

を指す。

7）小中学校で友達関係に悩む子どもを励ます趣旨で書かれた中川（2017）の主張は、ギャングエイジの行動をどう見るのか、という点など参考になるが、選択の度合いが増す大人と、学校という場で「友達」という人間関係そのものを学ぶことになっている児童生徒とをどの程度比較できるかは、研究として深めていくべき点と思われる。

8）数少ない研究の中でも、「友達」のトラブルと教師の介入に焦点を当てた寺町（2021）がある。また、インタビュー調査による回顧ではあるが、小中学校の仲間関係と階層性に焦点を当てた鈴木（2012）がある。

9）「友達」とトラブルの最中にある回答者の場合、「友達」関係に否定的な回答をする可能性は高いだろう。「友達」関係は流動的であり、1 時点の調査やデータだけで把握することは難しい。

10）「親族」、「隣人」、「同僚」は、他者との関係に占める社会的位置を表すカテゴリーを表している一方、「友達」は関の質が問われることになる（Allan1989＝1993：24）。隣に住んでいれば「隣人」、同じ職場であれば「同僚」、同じ学級であれば「クラスメート」であるが、「友達」と呼ぶにはその関係性が問われることになる。藤野（2018）はアリストテレスの議論を参照し、友情の構成要素として、①他者に惹かれること、②相手のために良かれと願うこと、③双方向的であること、④双方共に気づいていること、を挙げている（藤野 2018：42-53）。友人をめぐる議論では「真の」や「本当の」といった友情が語られ過大な要求が掲げられる傾向にあるが、アリストテレスの議論はそうした要求を掲げず、過不足なく定義していると藤野は指摘する。ただし、Chambers（2006＝2015）によれば、ア

リストテレスの友情モデルは今日にも強い影響力を持っているが、このモデルは男女間の、あるいは女性間の友情を排除している。そのため、アリストテレスのモデルを無批判に学校の「友達」へ援用することは避けた方がよいだろう。

【引用・参考文献】

Allan, Graham,1989, *FRIENDSHIP:DEVELOPING A SOCIOLOGICSL PERSPECTIVE*, Harvester Wheatsheaf (=1993 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社)

Chambers, D. 2006,*Connections in a Fragmented Society*, Palgrave Macmillan. (＝2015, 辻大介・久保田裕之・東園子・藤田智博『友情化する社会-断片化のなかの新たな〈つながり〉』)

藤野寛、2018、『友情の哲学―緩いつながりの思想』作品社。

藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳、1996、「小・中学生の友人関係とアインデンティティに関する研究―全国９都県での質問紙調査の結果より―」『東京大学大学院教育学研究科紀要』36：105-127。

土井隆義(2008)『友だち友達地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』 筑摩書房。

Giddens, Anthony,1991, Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age, Polity Press (＝2005、秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』ハーベスト社)

――,1992, The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love, and Eroticism in Modern Societies, Polity Press (＝1995、松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム―』而立書房)

石田光規、2021、『友人の社会史―1980-2010 年代　私たちにとっ

て「親友」とはどのような存在だったのか―』晃洋書房。
門下祐子、2021、「友情・愛情・恋愛」″人間と性″教育研究協議会企画編集『Sexuality』(103)、pp.10-11.
片田孫朝日、2014、『男子の権力』京都大学学術出版会。
中川淳一郎、2017、「“小中学校の友人”なんてクソみたいなもの」『PRESIDENT Online』(2017/10/11)
荻野雄飛、2021、「ピアプレッシャー」″人間と性″教育研究協議会企画編集『Sexuality』(103)、pp.12-13.
住田正樹、1995、『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会。
鈴木翔、2012、『教室内カースト』光文社新書。
丹野宏昭、2019、「友人関係」松井豊監修畑中美穂ほか編『対人関係を読み解く心理学　データが照らし出す社会現象』サイエンス社、pp.1-22.
寺町晋哉、2021、『〈教師の人生〉と向き合うジェンダー教育実践』晃洋書房。
東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所、2018、「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015-2017（速報版）」
辻大介、2015、「つながる―友人関係とジェンダー―」伊藤公雄・牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学〔全訂新版〕』世界思想社, pp.189-201.
歌川光一、2021、「養護教諭の立場から学校を俯瞰する―友人関係研究からの期待」『聖路加国際大学教育実践論集』1、pp.54-60.
山口季音、2021、『児童養護施設の生活環境のダイナミクス―家庭で暮らせない子どもの育ちと職員の実践―』学文社。
ユネスコ編（浅井春夫・艮香織・田代三江子・福田和子・渡辺大輔訳）、2020、『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】―科学的根拠に基づいたアプローチ』明石書店。
柳治男、2005、『〈学級〉の歴史学』講談社。